

大地から小さな学校のおたより

ブラジル第3アリアンサ富山県日本語学校便り NO10 5月号



5月になるととても寒くなってきました。朝晩は上着がないと本当に寒いです。4月下旬から始まった新型インフルエンザは世界中で猛威をふるっているようです。これから、寒い時期を迎えるブラジルでは、いつもの流行形インフルエンザにも気をつけなければなりません。普段から十分気をつけたいと思います。写真は第3アリアンサの夕日です。仕事を終え、家に帰る頃には、いつもこの夕焼けを見ることができます。広い大地で見る、この景色は、とてもきれいですよ。

「母の日」は流しそうめんで決まり！

「先生、母の日に、何か面白いことできないですか？」と村の会長さんに言われ、とっさに思いついたのは、なぜか「流しそうめん」でした。この「流しそうめん」はとても好評でした。つゆを作ったのは、もちろん料理人の息子である私です。父から受け継がれた腕で、80人分のつゆ作りに挑戦しました。ブラジルにも醤油、みりんがあります。だしはインスタントの物を使ったのですが、ブラジルに全部揃っていても日本とは全く違う味です。少々味が薄いかと思いましたが、しいたけを入れてだしや風味をつけてみたらとてもいい味になってくれました。流れてくるそうめんを取っては、おいしそうに食べてくれました。その他、トン汁も私が作りました。皆さん初めて食べるものばかりだったそうです。皆さんにとって、私にとっても楽しい母の日になりました。



やはり、カラオケは好きではありません。でもこの曲は好きです。

「第18回アリアンサナツメロカラオケ大会」がありました。カラオケ愛好会では、なぜかカラオケ嫌いの私がメンバーに入っていて、いつも大会に出場しています。今回も司会を務めました。「～さんありがとうございました。とても上手に歌っていただきました」とコメントを入れながら司会をするのですが、私にはそのコメントのボキャブラリーが少ないようです。「とても丁寧に歌っていただきました。」「すばらしい」「うまい！」などをコメントするのが精一杯、私の頭にはまだまだ美しい日本語が足りないことに気が付きました。きっとこの先も司会を務めることになるので、もう少し日本語について勉強したいと思います。



第2アリアンサ鳥取村会館にて

今回はナツメロなので、「見上げてごらん夜の星を」を歌いました。日航機墜落事故で亡くなった坂本九さんのお話をした時、あの事件を知っている人もいました。その時初めて私は、馴染みのある曲が坂本九さんによって歌われていたことを知り、「上を向いて歩こう」がアメリカのヒットチャート1位になるほどの曲になっていたことも知りました。その時よく流れていた曲の中で特に印象に残っていたのが「見上げてごらん夜の星を」でした。

もちろん恋人同士のロマンチックな歌ではありますが、そこには、詩と曲の持つ力を感じさせてくれます。「見上げてごらん」と詩中の恋人に呼びかけているのですが、実は曲を聴いている人にも呼びかけています。「小さな星がささやかな幸せを歌っている」の歌詞には、遠くにある星を擬人化させることで星に注目させ、逆に、「僕らのように名もない星がささやかな幸せを祈っている」の歌詞で、小さいもの同士の星と僕らの心理的距離感を近づけるのです。はじめに「見上げてごらん」と呼びかけているので、そのつながりは曲を聴いている人にも向けられるのです。この距離感と共感を上手いこと表現しているこの曲の素晴らしさに気がついた時、この曲がとても良くできていると思いました。昔の歌には、詩と曲が一致している曲が多いのは気のせいでしょうか。

夜学が再開されました。



今年7月までの夜学は、日本映画上映会（1回）木版画教室（5回）初級日本語教室（7回）を設けました。映画会では10人、木版画教室には8人、初級日本語では2人が受講しています。木版画教室では、初めて彫刻刀を握る人ばかりですが、とても興味を持っていただいているようなので、美術教師としては本領発揮の場面です。初級日本語教室は非日系の奥さん2人です。全く日本語が分からないのですが、私は日本語で直接教えています。たまに辞書で調べて教える時もありますが、東京外国語大学での研修を生かし、視覚的な資料をたくさん用意してあの手この手で教えています。来月号では、これらの様子を詳しくお伝えしようと思います。

日本語はアートになります。

形容詞、色、「てください」「ています」「あります。います」それらを総合したアクティビティを考えてみました。その名も「お絵描きミッション」です。

「赤色で、少し大きくてまるい顔を描いてください。」

「黄色で三角の鼻を描いてください」

「黒色で、長い髪の毛を13本描いてください」

「雨が降っています、その人の近くにはアルマジロがいます」

これらの言葉から、子供たちは絵を描いていくことになるのですが、意外や意外！高校生たちの方がいい絵を描くので驚きました。ミッションなので、上手い下手は関係ありません。上手く描くことが求められていないので、子供たちは、出来る絵がどうなるのかとても楽しみになるようです。そして出来る絵はすべて変な絵になるように設定してあるので、子供たちは出来上がった作品を見ては大笑いでした。「笑う」と言うことは一人に対して行くと、それはその人に対しての侮辱になる時があります。しかし、その笑いがすべての人に共通するものになると、それは愉快で、なおかつ互いの面白さに気づく場面となります。

小さい子どもたちに「これは誰ですか」と聞くと「せんせい！」と元気な返事がきます。「先生はメガネをかけています」と言うと、笑いながら競うようにしてメガネを描きました。私は自分について笑われるのがとても好きなので、私にとっても楽しい一時でした。



お礼

11月号で「この花の名前が分かりません」と掲載したら、富山県の方、ブラジル日系の方がメールやお手紙で「plumeria プルメリア」と教えていただきました。「大地から小さな学校のお便り」が日本ブラジルで読まれていることを知りとてもうれしく思います。本当にありがとうございました。

挿絵 「大地の日記—私と犬—」 2009年5月制作